

健康の輪

題字／初代会長 廣瀬勝代

- ◆ 発行／公益社団法人 全国結核予防婦人団体連絡協議会
〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町 1-3-12 TEL 03-3292-9288
- ◆ 編集／全国結核予防婦人団体連絡協議会事務局（結核予防会内）



2026年度 複十字シール図案
デザイン／あさいとおる氏

第 30 回結核予防関係婦人団体中央講習会



令和8年2月25日（水）、26日（木）の両日、東京都千代田区において、結核予防会総裁秋篠宮皇嗣妃殿下のご臨席のもと、第30回結核予防関係婦人団体中央講習会が開催され、開講式で、総裁よりお言葉を賜りました。

第 77 回結核予防全国大会



令和8年3月17日（火）、18日（水）の両日、愛媛県松山市において、結核予防会総裁ご臨席のもと、第77回結核予防全国大会が開催されました。大会式典では、総裁よりお言葉を賜り、同式典では第29回秩父宮妃記念結核予防功労賞表彰式が行われ、受賞者には総裁より表彰状が授与されました。

（お言葉は本誌2ページに掲載）

第三十回 結核予防関係婦人団体中央講習会のお言葉

令和八年二月二十五日（水）

本日、「第三十回結核予防関係婦人団体中央講習会」の開講式にあたり、全国よりお集まりの皆さまにお会いできましたことを、大変うれしく思います。

今年は、東京で「結核予防関係婦人団体中央講習会」が開催されるようになって三十年目になります。

この三十年をふり返りますと、日本における結核対策は、治療法や検査技術の進歩、多剤耐性結核への対応など、着実に進展してまいりました。そうした中で、婦人会の皆さまは、全国各地において結核やその他の感染症の正しい知識を地域の人々へ伝え、健康を支える活動に熱心に取り組むなど、大切な役割を果たしてこられました。昨年九月の厚生労働省の発表によれば、日本で一年間に新たに登録された結核患者数は約一万人、罹患率は八・一となり、二〇二一年から四年連続して低まん延の水準を維持しています。

世界に目を向けますと、結核は依然として深刻な感染症です。WHOによる推定では、世界で一年間に約一千七十万人が結核を発病し、約百二十万人が結核で亡くなっているとされています。そして、世界の人口の約四分の一がすでに結核菌に感染しており、栄養不足やHIVウイルスへの感染による免疫の低下などの要因が、結核を発病するリスクを高めるとされています。そのため、WHOは国や地域を越えた結核対策への協力を呼びかけています。日本でも、高齢者などを中心に結核の発症がみられることや、診断の遅れが重症化につながるなど、引き続き注意を要する課題が残っています。

この三十年の間には、SARSや新型インフルエンザ、そしてCOVID-19など、新しい呼吸器感染症が社会や地域の暮らしに度々大きな影響を及ぼしました。結核予防婦人会は、COVID-19が流行した時期には、不足していたマスクを作って支援したり、医療従事者への理解を呼びかけたり、健康を保つための情報の発信や、地域の人々が孤立しないよう工夫しながらの見守りを続けたりなどされ、あたたかい気持ちで伝わってきました。このように長年にわたり、人々が健康にすごせるよう力を尽くされてきた皆さまに深く感謝いたします。

毎年おこなわれる本講習会は、参加者が講義などを通じて、新たなことを知り、学びを深めるとともに、それぞれの経験や課題を伝え合う、話し合いの場となっています。私も今回の講習会で皆さまと一緒にさまざまなことを学び考え、人々の健康を支える活動を進めていく大切さを共有できましたらと思っております。

この二日間にわたる講習会が、皆さまにとりまして意義深いものとなりますようお願い、開講式に寄せることばといたします。

第七十七回 結核予防全国大会 総裁お言葉

令和八年三月十八日（水）

ANAクラウンプラザホテル松山（愛媛県松山市）

本日、「第七十七回結核予防全国大会」が愛媛県において開催され、皆さまにお会いできましたことを大変うれしく思います。

本大会におきまして、「第二十九回秩父宮妃記念結核予防功労賞」の表彰を受けられる皆さまに心よりお祝い申し上げます。この度の受賞者をはじめ、長年にわたる結核対策に取り組んでこられた多くの方々に対し、深く敬意を表します。

日本における結核の状況をみまると、結核罹患率は着実に低下してきましたが、二〇二四年は低まん延国の水準を維持しながらも、罹患率は八・一で前年と変わりがありませんでした。年間約一万人以上が新たに結核患者として登録され、一千四百人以上が命を落としています。若年層で結核患者が増加し、特に増えた二十歳台では、外国生まれの患者の割合が九割を占めています。このような状況の中で、結核の診断を遅らせず、完治するまで治療を受けられるようにするために、患者の周囲の人々と協力し、言語や生活習慣などの違いをも越えて最善の医療を進めておられる関係者の皆さまのご尽力に感謝いたします。

また、世界では、WHOの推定で一年間に約一千七十万人が結核に罹患し、百二十三人が亡くなっていると報告されています。SDGsの目標の一つである、結核の終息を実現するために、私たちを含め、世界の結核対策の関係者が協力し、努力を続けていくことが求められています。

昨日おこなわれた研鑽集会では「目を凝らして高齢者・外国出生者の結核と向き合う」をテーマに、国の審議会の最新の動向や愛媛県の結核の現状と対策などについての発表がありました。ここにお集まりの皆さまをはじめ関係者が力を合わせ、対策をさらに充実させていくことが重要であると思います。

毎年、九月二十四日から三十日までの「結核・呼吸器感染症予防週間」には、結核予防会が厚生労働省をはじめ行政機関・学会や結核予防婦人会などと協力し、普及啓発活動をおこなっています。コロナ禍の記憶が薄れつつある中、特に症状が重くなりやすい高齢者や基礎疾患のある人にとって呼吸器感染症への対策が必要であると広く知らせることが大切です。予防週間におこなわれる街頭キャンペーンやシンボルタワー等のライトアップは、結核やその他の感染症予防を心に留めてほしいというメッセージを発信しています。

昨年の予防週間には、ここ愛媛県においても愛媛県庁本館ドームが赤色にライトアップされ、複十字シール運動の一環として街頭募金運動がおこなわれたと伺いました。また、昨年の秋に訪れた北海道札幌市では、北海道庁旧本庁舎など三か所が初日にライトアップされ、札幌駅近くの地下歩道空間で結核とCOPDの予防普及啓発キャンペーンがおこなわれているのを見学しました。このように各地で、結核や呼吸器感染症に関する正しい知識の普及を目的として様々な取り組みが続けられていることは大変意義深いことであると思っております。

本大会に参加されている皆さまが健康に留意され、それぞれの場で結核および呼吸器感染症を防ぐ活動を進め、誰もが安心して暮らすことのできる社会になることを願い、式典に寄せる言葉といたします。

結核の資料をたどって

～清瀬の結核研究所図書室と看護大学校図書館、

そしてしょうけい館の特別展示を見学～

結核予防会総裁 秋篠宮紀子

結核予防会では、2009（平成 21）年から「TB アーカイブ」事業が始まりました。これは、結核に関わる今後の研究や技術に役立つ標本や診療録等の資料、文献、また社会文化史的な資料などを広く収集し、適切に管理し、後世に継承することを目的としたものです。機関誌『複十字』に、この事業の内容が継続的に掲載されています。

今年の3月下旬に清瀬の結核研究所の図書室を訪ね、TB アーカイブ事業で集められた資料の一部を見ることができました。当日は結核研究所に隣接する国立看護大学校の図書館にも出かけ、結核の書籍を含む看護学の貴重な資料を見せていただきました。

結核研究所の図書室

これまで結核予防会の総裁として結核研究所を訪ね、抗酸菌部（結核菌検査・管理保管施設）や病理検査室、標本室の説明を受ける機会がありましたが、図書室に入ったのは今回が初めてでした。

結核予防会の石川顧問をはじめ TB アーカイブの関係者から、所蔵している資料を見せてもらいながら、説明を聞きました。



図書室の蔵書の総数は約4万3千冊、その半数以上が外国語の文献です。4年前に古い本や雑誌のカビなどを落とす清掃を約5ヶ月かけておこない、その後もサーキュレーターや除湿機で図書室内の空気を管理し、紙の資料がこれ以上経年劣化しないように努力しているとのことでした。国内外で刊行されている結核関係の学術雑誌が電子化され、大学や研究機関などのパソコンでも閲覧できるようになったため、所内利用者は自席で閲覧でき、歴史的な文献を参照するのは外部利用者が中心になっているそうです。

蔵書のうち最も古いものは、幕末の1832（天保3）年に華岡青洲が著した『瘍科方箋』の写本です。そし

て、最も古い逐次刊行物は、ドイツの *Berliner Klinische Wochenschrift*（ベルリン臨床医学週報）で、コッホが結核菌を発見した報告が掲載された1882（明治15）年の号もあります。



結核関係の書籍や雑誌の他に、結核対策のために作られたポスターや紙芝居、映画のDVDなども図書室の所蔵品です。ポスターの現物は貴重な資料として保管し、原寸大の複写版を額装して、展覧会などに貸し出しています。地図やイラストレーションを使い、結核の現状や対策をわかりやすく伝えようと工夫されたポスターから、結核対策に取り組んでいた人々の熱意と努力が伝わってくるようでした。

化学療法が導入される前に外科的治療に使われていた「人工気胸器」の説明もありました。人工気胸とは、胸の側面（わきの下）に針を刺し、空気を注入することで人工的に気胸と同じ状態をつくりだし、肺を萎縮させ、肺の動きを抑制して結核菌の増殖を抑える結核の治療法です。一回では済まず、何回もおこなわれました。日本では1955年頃までおこなわれていました。身体的にも精神的にも負担が大きく、とても痛い治療だったと伺い、当時の患者の気持ちが偲ばれました。

1時間ほどの見学でしたが、時間が短く感じられました。資料をさらにじっくり見たい、当時のことをもっと知りたいという気持ちを抱きながら、図書室を後にしました。

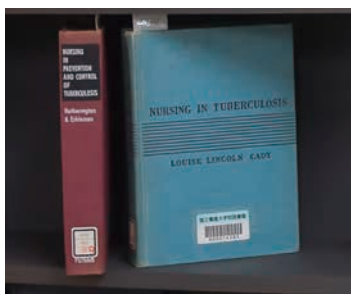
国立看護大学校の図書館

結核研究所と道を挟んだ向かいには、国立看護大学校があります。高度な看護の実践と研究の能力を身につけ、先端医療の現場や国際的な医療援助活動で活躍できる看護師、助産師を育成することを目的に2001年に厚生労働省が設立した4年制の学校です。創立時の式典に出席し

たご縁で、今年4月の開校25周年式典でもお祝いのことばを述べることになり、その前に校内を見学する機会をいただきました。

大学校には看護学の貴重な蔵書をもつ図書館があり、特別展示「戦後の看護教育の変遷 国立看護大学校所蔵の貴重書をたどる」がおこなわれていました。

展示資料には、看護学の基礎を作った英国のナイチンゲールの原著がありました。ナイチンゲールがクリミア戦争中に看護にあたった19世紀半ば頃は、まだ感染症の原因である細菌やウイルスなどの病原体が発見されていない時代でした。しかし、戦場の病院での経験などをもとにナイチンゲールが主唱した、病室に新鮮な空気と太陽の光を取り入れ、部屋を清潔に保ち、多数の患者を密集させないという感染防止策は、その後の結核療養所での看護にも通じる内容に感じられました。



また、結核の看護に関する1940～50年代の英語の専門書 *Nursing in Tuberculosis* と *Nursing in Prevention and Control of Tuberculosis* も展示されていました。結核に関する古い資料では、その他にも、1948（昭和23）年に翻訳出版された『保健婦のための結核教本』や、厚生省が1955（昭和30）年から結核予防会などと協力しておこなった結核実態調査の報告書など、貴重な書籍が所蔵されています。

しょうけい館（戦傷病者史料館）の展示 「戦傷病者と結核—軍隊での罹患から戦後の闘病生活まで—」

結核研究所の図書室を訪ねたときに、千代田区にあるしょうけい館（戦傷病者史料館）で結核予防会の資料が展示されている話を聞き、早速4月下旬に訪ねました。

しょうけい館は、戦傷病者やその家族が体験した戦中・

戦後の労苦を後世に語り継ぐ施設として厚生労働省が2006（平成18）年3月に開館した施設です。戦地で怪我をしたり病気になったりした元兵士が身につけていたものや、治療や療養、リハビリテーション、社会復帰などに関する資料、写真、映像、体験記を収集・保存し、常設展と季節ごとの企画展示をおこなっています。

今回の企画展では、日本の軍隊で結核が大きな問題であったことが分かりやすく示されていました。1941年（昭和16）頃から徴兵検査でほとんど全員がレントゲン検査を受けましたが、満州事変以後、戦争が続く中で結核を発病する兵士が増え、除隊理由の第1位を占め続けました。傷痍軍人のための療養所は、最も多い時期に全国で56か所ありましたが、そのうち36か所が結核療養所だったそうです。

実際に結核を発病し、療養を余儀なくされた元兵士の証言には、負傷し右足を失い、さらに従軍中に罹った結核が悪化して胸椎カリエスでも苦しんだ人、シベリアに抑留されていた間に結核に罹患し、帰国後それによって就職が難しくなって苦勞した人などの辛いお話がいくつもありました。

また学芸員からは、結核に罹患した夫が療養している間、妻が一家のために外で働き、子育ても一手に引き受けていたことや、療養所から夫が戻っても、子どもに結核がうつることを恐れ、距離を置いたために、親子のコミュニケーションがうまく取れなかったことなど、患者と家族が直面した悩みについてのお話も聞きました。

結核研究所の資料からは、結核が「国民病」であった時代の医師や保健行政の担当者が、さまざまな制約がある中でも真摯に結核対策に向き合う姿勢が伝わってきました。看護大学校の図書館の展示では、戦後間もない時期から、看護師の教育にも当時最新の結核看護に関する書籍が使われていたことを知り、その後の結核対策につながる教育現場の強い意志を感じました。そして、しょうけい館では、非常に困難な状況にあった患者とその家族がどのようなことを考え、悩み、回復するために苦闘していたのか、その一端にふれることができたように思います。こうした貴重な資料が感染症対策の歴史を学ぶ研究者や学生に今後も活用されていくことを願っています。

現在も結核対策は、医療や行政の専門家をはじめ、患者に寄り添う家族や地域の人々によって支えられています。また新たな治療薬やワクチンの開発を進めている研究者たちもいます。結核という難しい感染症と向き合い努力を重ねている皆さまへ改めて感謝いたします。

参考
結核予防会「電子資料館 TB アーカイブ」
<https://www.jatahq.org/headquarters/document/tb-archive>
しょうけい館「これまでの企画展」
<https://www.shokeikan.go.jp/exhibitions/kikaku/past/2025>

第30回結核予防関係婦人団体中央講習会に参加して 婦人会が教えてくれた、宿毛で暮らすということ

私は、高知県健康づくり・宿毛市連合婦人会に所属しています。

婦人会の活動に少しずつ関わる中で、第30回結核予防関係婦人団体中央講習会に参加する機会をいただきました。

私自身、結核予防について十分な知識があったわけではありません。参加を前に少し不安もありましたが、義母から、「わからないからこそ、学んできたらいいい」という言葉を聞いて、確かにその通りだと思い、今回の中央講習会は大切な機会になると感じ、参加させていただきました。

婦人会の活動に関わるようになったのは、東京から高知県宿毛市へ移住したことがきっかけでした。

宿毛市は、夫の生まれ故郷です。

息子が一歳半の頃に体調を崩したことや、コロナ禍、自宅で過ごす時間が増えたことも重なり、もっとのびのびと子育てができる環境で暮らしたいと思うようになりました。

そうして東京での暮らしを離れ、高知県宿毛市へ移住して三年が経ちます。

東京で暮らしていた私にとって、宿毛での生活は新しいことばかりでした。

地域のこと、言葉の響き、人との距離感。

どれも東京での暮らしとは違い、最初は戸惑うことも多くありました。

買い物ひとつにしても、どこのお店に行けばよいのか。

地域の行事は、いつ、どのように行われているのか。

日々の暮らしの中で、わからないことがいくつも出てきます。

そんな時、義母が「婦人会に入ってみる？」と声をかけてくれました。

とはいえ、当時の私は、婦人会がどのような活動をしているのか

もよくわかっていません。

仕事や育児に加え、まだ慣れない土地での暮らし。

そこに婦人会の活動まで加わって、自分にできるのだろうか。

そんな不安もありました。

すると義母は、「入ってみて、もし合わなかったらやめればいいよ」と言ってくれて、さらに、「完璧にやらなくても大丈夫。まずは、知ることから始めればいいけん」と、気負わず参加できるように声をかけてくれました。

その言葉を聞いて、婦人会というものを難しく考えすぎず、まずは地域のことを知るきっかけとして参加してみよう。

そんな気持ちで、私は婦人会に参加することになりました。

婦人会に入ってからまだ三年ほどの私にとって、主な活動は地域イベントのサポートです。

「婦人会活動」と聞くと、とても立派なことをしているように思われることもあります。

もちろん大切な活動ではありますが、実際の現場はもっと身近で、暮らしに近いものです。

地域の行事で焼きそばを作ったり、宿毛市の復興まちづくり計画や地域課題について意見交換に参加したり。

難しいことばかりではなく、地域の中で人と会い、話し、手を動かしながら、少しずつ関わりが生まれていきます。

婦人会に入ったことで、宿毛の暮らしは少しずつ身近なものになっていき、地域のことだけではなく、伝統の話、新鮮な野菜、魚を食べる楽しさとおいしさなど。

そうした宿毛ならではの暮らしの豊かさも、婦人会を通して知ることができました。

特にお刺身のおいしさには驚きました。

おかげで、ついお酒も進みます。

高知県健康づくり・
宿毛市連合婦人会
高倉 里美



これは宿毛に来てから覚えた、うれしい困りごとの一つです。

六歳の息子は、地域の集まりや婦人会での様子を見て、「美味いがいっぱいだね」と言います。

子どもの言葉は正直ですね。

もしかすると息子にとっての婦人会は、地域活動というより、おいしいものに出会える場所なのかもしれません。

けれど、それもまた地域とのつながりの一つだと感じています。

そうした日々の活動の延長として、今回の中央講習会に参加させていただきました。

参加してまず感じたのは、結核予防の活動を、婦人会の皆さまがこれほど長く、地道に続けてこられたことへの驚きでした。

また、中央講習会では、全国で活動されている婦人会の皆さまのお話を伺うことができました。

普段は、目の前の地域行事や日々の活動に向き合うことが中心ですが、その一つひとつが、地域の健康づくりや人とのつながりにつながっているのだと、改めて感じる機会になりました。

また、総裁である紀子様と同じテーブルでお話をさせていただくという、大変貴重な機会もいただき、これまでテレビなどを通して拝見していたお方が目の前にいらっしゃることに、とても緊張いたしました。

しかし、紀子様はとても温かくお声をかけてくださり、結核予防のことだけでなく、各地域で活動する婦人会の皆さまのお話にも丁寧に耳を傾けてくださいました。

そのお姿を拝見し、地域での小

さな活動も、全国の大きな活動につながっているのだと感じました。

そして、この活動が長きにわたり受け継がれてきたことの重みを、改めて感じました。

今回の講習会を通して、婦人会活動は、特別な誰かが行うものではなく、地域に暮らす一人ひとりが、できることを持ち寄りながら続けてい

くものなのだと感じました。

中央講習会は、周りの婦人会会員の方々にもぜひ参加を勧めたいと思いました。

知識を得るだけでなく、自分たちの地域での活動の意味を見つめ直す時間になるからです。

最初は、地域のことを知るきっかけとして参加した婦人会でしたが、

今では、宿毛で暮らす私にとって、人とつながり、地域を知り、自分にできることを考える大切な場所になっています。

まだまだ学ぶことばかりですが、これからも宿毛市の一員として、婦人会の先輩方に教えていただきながら、地域の健康づくりに少しでも関わっていききたいと思います。🍷

第77回結核予防全国大会決議文

我が国における2024年の新規登録結核患者数は10,051人、罹患率10万対8.1と低まん延状態を維持したものの、それぞれ前年と比べてわずかな減少または横ばいにとどまった。80歳以上の高齢者が4割を占めていること、また、外国出生患者の増加が大きな課題となっている。

高齢者が結核に罹患しても典型的な症状に乏しく合併症により重症化するリスクが高い。とくに後期高齢者の増加を踏まれば、より一層十分な対策を継続する必要がある。一方、言葉の壁や文化の違いを背景に持つ外国出生患者に対しては、広く社会における多文化共生に対する理解の下に患者中心の対策をさらに推進する必要がある。以上から、情報のデジタル化、病原体サーベイランス体制の確立等結核対策の強化、結核医療体制の再編及び質の確保、さらに世界的に進捗が著しい新薬や新技術の導入などの多くの課題に対応する必要がある。

世界に目を転じると、WHOの統計では世界の推計患者数は1,070万人、死亡者数は123万人であり、新型コロナウイルス感染症（以下「コロナ」という。）に代わり結核は再び感染症の死因の第1位になった。呼吸器感染症による新たなパンデミックの出現が危惧されている中、結核は今なお世界の公衆衛生上の重要な課題である。一方で、国際的な支援体制の枠組みが変容し、対策の推進を阻害する事態も発生している。このため、さらなる国際的な連携の下に、こうした課題を乗り越え、革新的技術の開発及び導入を取り入れた結核終息戦略の進展が求められる。

以上のような状況を踏まえて、国・自治体・医療機関・結核予防会、そして地域社会を結びつけてきた全国結核予防会支部及び婦人団体連絡協議会が連携し、究極の目標である「結核根絶」に向けて、科学的根拠に基づく結核・呼吸器感染症対策を、国際協力、市民参加、産官学連携のもとにより一層推進していくことが不可欠である。よって本大会は、関係団体が力を合わせ、次の4項目について不断の努力を行うことを決議する。

- 一、結核根絶を目指して高齢者・外国出生者などハイリスクグループに重点を置いた予防啓発、適切なスクリーニングの実施、有症状者の早期受診・早期の診断治療の確保、患者中心の服薬支援体制の強化のための医療・対策を一層推進すること。
- 一、コロナ対応で得られた知見を踏まえ、結核を含む呼吸器感染症の診療が適切に実施されるよう、医療提供体制や公衆衛生部門の機能強化を促進すること。
- 一、産官学連携による革新的な診断・治療技術の開発と導入に積極的に取り組み、日本の結核対策の知見を生かして、国際協力をさらに推進し、世界の結核終息の達成に貢献すること。
- 一、全国結核予防婦人団体連絡協議会は、関係団体と協力して、結核および呼吸器感染症に関する正しい知識の普及・啓発活動を推進するとともに、複十字シール運動をより効果的かつ広範囲に展開し、その活性化を図ること。

令和8年3月18日

第77回結核予防全国大会

第77回結核予防全国大会を終えて

令和8年3月17日(火)・18日(水)にANAクラウンプラザホテル松山4階ダイヤモンドボールルームにて、結核予防会総裁秋篠宮皇嗣妃殿下ご臨席のもと、第77回結核予防全国大会が開催されました。

<全国結核予防婦人団体連絡協議会懇談会>

結核予防会総裁秋篠宮皇嗣妃殿下は、桜の季節に合った薄いピンクのスーツを御召しになり、リラックスされたご様子で、にこやかに席にお着きになられました。結核予防婦人会木下会長と私の挨拶の後、妃殿下は各テーブルを回られご歓談されました。

<全国結核予防婦人団体連絡協議会写真撮影>

別室において恒例の妃殿下との写真撮影が行われました。私たち愛媛県は、開催県ということで最前列に着くことになりました。身に余るほどの光栄で、緊張いたしました。撮影後、妃殿下がこの日89歳の誕生日を迎えた木下会長に「お誕生日おめでとうございます」と花束を贈られました。妃殿下が退出された後、その場の参加者でハッピーバースデーの歌でお祝いをしていると、妃殿下が手拍子をしながら戻って来られ、その場が大いに盛り上がりました。

<研鑽集会>

テーマ：「目を凝らして高齢者・外国出生者の結核と向き合う～子規の地 愛媛から未来へ～」

(1)「結核に関する特定感染症予防指針」改正に向けてー厚生科学審議会の役割

公益財団法人結核予防会結核研究所副所長
慶長 直人 氏

結核について、取り組みの方向性を示した国の基本方針とは、

- ①結核低蔓延国に達した現在、これからの方向性を示すこと
- ②日本のどこに住んでいても、引き続き十分な結核治療、支援が受けられること
- ③対象を絞った効率的な対策を推進すること

以上のことを、医学の立場から、ひとりひとりの人権に配慮しながら、研究がすすめられていることを知りました。

(2)「愛媛県の結核の動向・対策」について

愛媛県四国中央保健所所長 影山 康彦氏

- ①結核患者数、罹患率は、全国と同様に低下がみられる。
- ②外国出生患者数及び割合は、増加傾向が続いている。
- ③65歳以上の割合は、増加傾向にあったが、最近はやや横ばい傾向にある。

世界各国の結核推定罹患率を見ると、アジアが圧倒的に多く、特に近年は東南アジアから労働に来る人が多いとのこと。これを見据えて、愛媛県としては、外国出生患者への対応や高齢者への対応に力を注いでいます。さらに、医療提供体制の充実を図っているとのこと。

(3)「結核対策における分子疫学解析の重要性」について

愛媛県立衛生環境研究所所長 四宮 博人 氏
愛媛県で分離された結核菌株遺伝子系統の分離年別の

愛媛県結核予防連合婦人会
会長 三好 康子



割合グラフを見て驚きました。北京・祖先型、北京・新興型、非北京型の3つの株の内、過半数を占めているのが、北京・祖先型といわれるものです。明治時代から大陸進出政策で中国大陸へ渡り、結核菌を持ち帰った人たちから感染したとのこと。その菌が今も人の体内で生きており、日本古来の結核菌も生きていとのこと。依然として結核は、全国で約10,000人が新たに発症し、約1,500人が亡くなるという、我が国最大の慢性感染症です。特に高齢化の進展により、結核は地域の健康課題として新たな形で私たちの前に現れています。感染予防の三原則は、『感染源の排除』『感染経路の遮断』『宿主の抵抗力向上』となっています。このことをよく考えて、自分で予防できることを取り組んでいこうと思います。

(4)「結核病床を有する医療機関ではどのように診療しているのかー入院結核患者の現状と課題ー」

公益財団法人愛媛県総合保健協会診療所所長
阿部 聖裕 氏

東温市にある愛媛医療センターの結核病床数は、戦後1,051床が2024年には16床にまで減少しています。このうち、高齢者の結核についての考察があり、問題点を教えていただきました。

- ①診断が遅れる…食欲低下や倦怠感などで見逃すことがある。
- ②重症化しやすい…免疫低下、糖尿病や悪性疾患などが合併
- ③治療に難渋する…副作用が出やすい、食事摂取量低下等で内服管理が難しい
- ④入院生活による機能低下…筋力低下、認知機能の低下、面会制限による精神的孤立
- ⑤退院・社会復帰が困難…受け入れ先(施設・家族)が困難

このほか、外国出生者の結核患者の増加、潜在性結核感染症などの問題を抱えているとのこと。課題がたくさんある中で、結核専門医療機関として専門性を生かし、細やかな対応と工夫をしながら医療に取り組んでおられることに敬意を表します。

<大会に参加して>

この大会に参加して、専門家や各医療機関が取り組まれていること等、現在の状況を分かりやすく学ぶことができました。結核は「過去の病気」ではなく、まだまだ現代の病気であることを一人でも多くの人に再認識していただくことが重要です。早期発見・早期治療を進め、結核撲滅のためには、医療機関や保健所だけでなく、私たち婦人会(女性会)が行っている複十字シール運動を中心とした、啓発・支援の輪を一層広め、誰もが安心して暮らせる地域づくりを目指してまいります。🐱

トウモロコシが教えてくれた動く遺伝子

－ 女性科学者マクリントックと私たちの結核予防 －

東京家政学院大学名誉教授
松田 正己



はじめに

「結核」と「トウモロコシ」。一見、何の関係もないように見えるこの二つが、じつは「命のたくましさ」というところで深くつながっています。

以前、本誌で微生物学者ルネ・デュボス（1901-1982）の名著『白い疫病』を取り上げました（令和5年11月15日号）。デュボスは、最初の妻を結核で失った人でもあり、抗生物質だけに頼るのではなく「健康の増進」と「環境」を整えることこそが結核制圧の鍵だ——と早くから訴え続けました。

本稿で取り上げるのは、ほぼ同じ時代を生きたもう一人の科学者です。トウモロコシの観察を続けたバーバラ・マクリントック（1902-1992）。デュボスとはまったく違うところから出発した彼女が、半世紀の孤独な研究の末にたどり着いた洞察は、不思議なことに、デュボスの思想

と深く響き合うものでした。

後にノーベル賞に輝いたこの女性科学者がトウモロコシの粒の模様から見出した発見——それは何十年もの間、科学界から無視され続けました。けれどもその発見は、いま私たちが目にしている結核の問題を、深いところで照らし出してくれます。本稿では、長く認められなかった一人の研究者の生涯をたどりながら、命のしくみと結核予防のつながりを考えてみたいと思います。

1. マクリントックという女性科学者

バーバラ・マクリントック（Barbara McClintock, 1902-



マクリントックの生涯

1992) は、アメリカ・コネチカット州ハートフォードに生まれました。1920年代、女性が研究者として働くことがまだ稀だった時代に、彼女はコーネル大学に進み、植物学と細胞遺伝学を学びます。当時の遺伝学は女性が正規に専攻できませんでしたが、彼女はそこに自分の居場所を見つけました。とりわけ、染色体の中で遺伝子を直接「見る」ことに、深い情熱を注ぎました。

20世紀の半ば、科学の世界には一つの強い常識がありました。「生命とは、変わらない設計図（DNA）に従って動く精密な機械である」という考えです。遺伝子は染色体の決まった場所に並び、決まった働きをすると信じられていました。

しかしマクリントックは、研究を進めるなかで、ある奇妙な事実に気づきます。遺伝子が染色体の中で「場所を移動」しているのです。トウモロコシの粒の色がまだら模様になるのは、このためだったのです。のちに「トランスポゾン（動く遺伝子）」と呼ばれる発見でした。

1951年、彼女はコールド・スプリング・ハーバー研究所のシンポジウムでこの発見を発表します。しかし反応は、想像していたものとはまったく違いました。聴衆は彼女の話を理解できず、無視しました。彼女の動く遺伝子という理論はほとんど顧みられないまま、20年の歳月が流れていきます。

それでも彼女は、研究をやめませんでした。コールド・スプリング・ハーバーの小さな建物に住み、自分で育てたトウモロコシの粒を一粒一粒丁寧に観察し、記録し続けたのです。「自分の見ているものは正しい」—その確信が、孤独な日々の彼女を支え続けたのです。

時代が彼女に追いついたのは、1970年代になってからのことでした。ほかの生物、細菌や、ショウジョウバエ、人間——でも、遺伝子が場所を移動する現象が次々と見つかり始めたのです。マクリントックの発見が、生命に共通する基本的なしくみだったことが、ようやく認められていきました。

そして1983年、81歳のとき、彼女はノーベル生理学・医学賞を受け取ります。この賞を女性が単独で受けたのは、史上初めてのことでした。「やっと時代が追いついた」と、世界中の科学者が祝福しました。

晩年、マクリントックはこう語っています。「ゲノムは細胞の敏感な器官である。内部の活動を見守り、誤りを修め、異常な出来事を感じ取り、自らを作り替えることで応答する」と。生命は不変の設計図ではない、環境からの挑戦に応じて、自らを組み替えながら生き延びていく。それが、半世紀の孤独な観察の末に彼女がたどり着いた、いちばん大切な洞察でした。

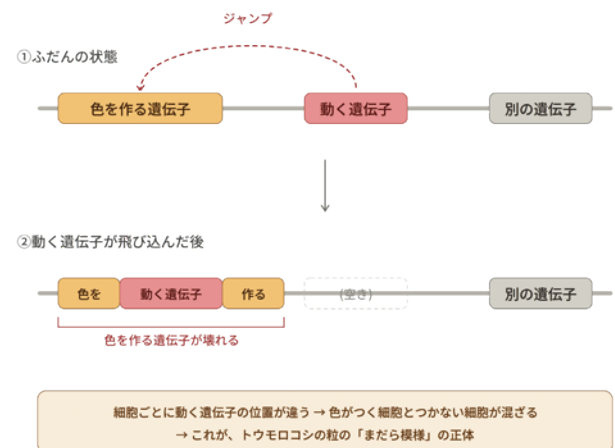
2. 「動く遺伝子」とは何か

ここで、マクリントックが発見した「動く遺伝子」のしくみを、もう少し詳しく見ておきましょう。

すべての生き物の体は、たくさんの細胞できています。その細胞の中には、長いひも状の「DNA」が折りたたまれて入っていて、その上には、「色を作る」「タンパク質を作る」など、それぞれの働きを担う「遺伝子」が、並んでいます。

ほとんどの遺伝子は、決まったページ番号の位置に静かに並んだまま動きません。ところが、マクリントックが見つけたのは、「ページの間を飛び移る」遺伝子なのです。

たとえば、トウモロコシの粒の色を作る遺伝子の近くに、この「動く遺伝子」が飛び込んでくると、色を作る遺伝子は壊れてしまい、その細胞からは色素が作られなくなります。粒の中で、ある細胞は色がついて、別の細胞は色につかない——これが、まだら模様の正体です。



動く遺伝子のしくみ

このしくみは、最初は「トウモロコシだけの珍しい話」と思われました。しかしいまでは、すべての生き物——細菌から人間まで——のDNAの中に、こうした「動く遺伝子」が無数に存在することがわかっています。

そしてこの「動く遺伝子」は、ふだんは静かにしていますが、生命に強いストレスがかかると、にわかに活発に動き出します。マクリントックは、トウモロコシに過酷な環境（X線照射による染色体切断など）を与えると、

動く遺伝子の働きが激しくなることを観察していました。
「生命は危機を感じ取り、自らを作り替える」——彼女が見ていたのは、まさにそのドラマだったのです。

3. 結核菌も「動く」 ——耐性菌が生まれるしくみ

ここから、トウモロコシと結核の話が交わります。
結核菌に、抗生物質という強烈な「命の危機」が降りかかったとき、何が起こるのでしょうか。菌たちは、ただ静かに死を待つわけではありません。マクリントックがトウモロコシで見たのと同じく、生命としての適応のしくみを総動員して、生き延びようとします。

ただし、結核菌の場合は少し特徴があります。ほかの細菌のように、菌どうして「耐性のためのメモ書き」（プラスミドと呼ばれる小さな DNA）を受け渡し合うことは、ほとんど起こりません。代わりに起きるのが、**菌の本体の遺伝子のごく一部に、小さな突然変異が生じる**ことです。

一個の結核菌が分裂を繰り返すうちに、ごくまれにこうした変異を持つ菌が現れる——これは確率の問題で、避けようがありません。

そこに薬が加わると、感受性のある（＝薬がよく効く）大多数の菌は死に絶え、たまたま耐性を持っていた菌だけが生き残ります。そして増殖を続け、やがて集団全体が、薬の効かない菌へと姿を変えていきます。



中途半端な治療や薬の組み合わせの不足は、この「選択」をさらに進めしまう
→ 多剤耐性結核菌(MDR-TB)、超多剤耐性結核菌(XDR-TB)へ

結核菌の耐性が生まれるしくみ：変異と選択

これは、マクリントックがトウモロコシで示した光景——生命がストレスに応じて自らを変えていく姿の現れと言ってよいでしょう。（なお結核菌の DNA にも、IS6110 と呼ばれる「動く遺伝子」がたくさん埋め込まれており、菌の進化や系統の多様化に深く関わってきたことがわかっています）。

問題は、こうした耐性のしくみが、私たちの治療のしか

たとも深く結びついている点です。きちんと薬を飲み切らなかったり、薬の組み合わせが不十分だったりすると、結核菌に耐性を獲得する「絶好の機会」を与えてしまいます。こうして生まれるのが、**多剤耐性結核菌(MDR-TB)**、さらに薬の選択肢を失った**超多剤耐性結核菌(XDR-TB)**です。世界では今もこの結核が深刻な問題で、日本国内でも毎年一定数が報告されています。

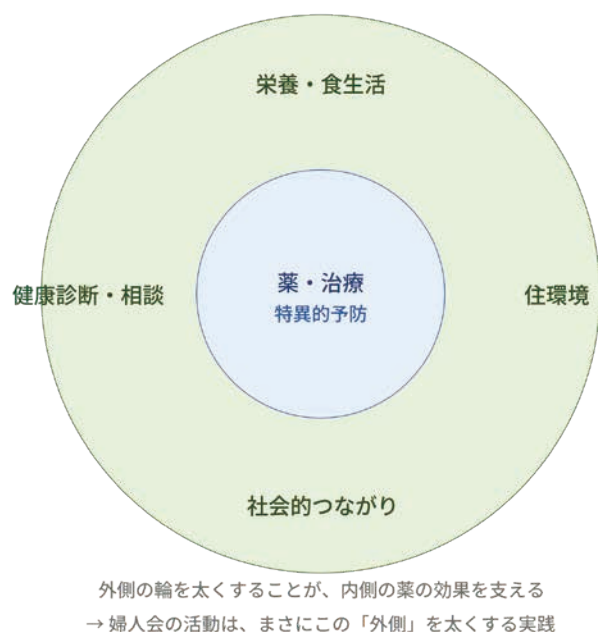
「強い薬で根絶やしにしよう」とすればするほど、菌は動的に応答し、より手強い形へ進化する——これは現代医療の難しいジレンマです。マクリントックがトウモロコシで掴み取った「生命は動く」という洞察は、いま、目の前の結核という現実のなかで、私たちに静かに語りかけているのです。

4. 命は環境と対話する ——地域と婦人会の活動

マクリントックの長い研究人生が私たちに教えてくれるのは、**生命とは、環境からの挑戦に応じて自らを作り替える、動的な営みである**ということです。これは、まったく別の道筋から結核と向き合ったデュボスが、長い思索の末にたどり着いた結論と、驚くほど深いところで重なっています。

このことは、結核菌だけの話ではありません。私たち人間も同じです。寒さや暑さに体を慣らし、ストレスから立ち直り、年齢を重ねながら適応していく。病気にかかっても、回復に向けて体は懸命に動いています。生命とは、生まれてから死ぬまで、「変わりながら生き続けるもの」なのです。

だからこそ、結核予防の本質は、薬だけでは完結しません。栄養のある食事、安心して眠れる住まい、無理のない働き方、人とのつながり、孤立しない地域——こうした生活全体が、私たちの体の「適応する力」を支えています。結核菌の感染を防ぎ、感染しても発病を防ぎ、発病しても重症化を防ぐ。そのどの段階にも、「環境を整える」という発想が効いてきます。



結核予防の二重構造

地域の隅々まで目を配り、人々の暮らしと健康に寄り添う婦人会の皆様の長年の活動は、まさに命のしくみになった、最高の予防実践と言えるのではないのでしょうか。

5. いま、再び注目される マクリントック

実は、マクリントックの研究は近年、世界で改めて大きく注目されています。彼女がトウモロコシで「動く遺伝子」を発見してから70年余りが過ぎたいま、これは生命科学の最前線を支える基本概念として、毎年膨大な数の研究論文で言及されています。

そして「動く遺伝子」は、私たちの健康に直接かわる重大な研究対象になっています。アルツハイマー病、がん、老化、免疫——これらの現代の主要な健康課題のいずれにも、「動く遺伝子」のはたらきが深く関与していることが、近年の研究によって明らかになってきました。私たち一人ひとりのDNAの中で、いまもこの「動く遺伝子」たちは静かに息づいているわけです。

さらに驚くべきことに、現代の生命科学が最近ようやくたどり着いた「エピジェネティクス」——遺伝子の働き方が、環境や経験に応じて変わっていくしくみ——についても、マクリントックはすでに半世紀以上前にその本質を見抜いていました。「ゲノムは固定された機械ではなく、敏感な器官である」という彼女の晩年の言葉は、いまの私たちの理解を、まさに先取りしていたのです。

長らく「孤独な異端の女性研究者」として描かれてきた彼女ですが、近年の歴史研究では、女性の科学者の業績が認められにくい構造的な問題のもとで彼女が苦闘してきたことが、丁寧に語り直されつつあります。マクリントックは、いま、研究の最先端と、女性の生き方の歴史と、その両方から、新しく光を当てられているのです。

おわりに 命を慈しむということ

マクリントックは生涯独身で、毎朝早くから畑に出てトウモロコシの一粒一粒に目を凝らしました。彼女にとって、その粒たちは「研究対象」ではなく、「対話する相手」でした。「植物の声に耳を傾けた科学者」——彼女はそう語られます。長く見つめていると、植物のほうから「語りかけてくる」のだと、彼女は晩年に話しています。

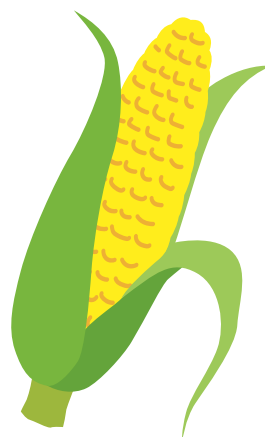
命を慈しむこと。一粒一粒に注意を払うこと。動いていく生命と、しずかに対話を続けること——これは、女性たちが地域で長年続けてきた営みと、深く響き合うものです。

マクリントックのトウモロコシのように、私たち一人ひとりの暮らしの隅々まで温かい目を向けながら、これからも健康の輪を広げていきましょう。🌽

- 参考文献：Carnegie Science. “Barbara McClintock: A Visionary Ahead of Her Time”(時代を先取りした先見の科学者), 2025年。
<https://carnegiescience.edu/barbara-mcclintock-visionary-ahead-her-time>

- 引用文献：イブリン・フォックス・ケラー『動く遺伝子——トウモロコシとノーベル賞』石館三枝子・石館康平訳、晶文社、1987年

松田正己、岩隈道洋、大林雅之、江口晶子、増田一世、ルネ・デュボス、バーバラ・マクリントック、武見太郎の生存観と生命観と生存科学、生存科学 Vol.36-2,2026（印刷中）



複十字シール運動が始まります

運動期間 8月1日～12月31日

公益社団法人全国結核予防婦人団体連絡協議会の皆様には、例年複十字シール運動にご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

2024年に新たに結核と診断された患者数は10,051人で、前年より45人減少しました。日本は2021年に9.2と結核低まん延国の水準を達成し、2024年も維持しています。しかし、新登録患者数全体のうち80歳以上の高齢者は42.7%を占めています。結核の早期発見のためには早めの受診がとても重要です。また、外国出生者の新登録結核患者数は1,980人で、前年より361人増加し若年層を中心に外国生まれの結核患者の増加傾向が続いていることにも注視していかなければなりません。これからも結核制圧のための複十字シール運動を皆様と共に広めていきたいと思います。

今年も8月1日から複十字シール運動が始まります。皆様には各都道府県知事への表敬訪問、募金活動等、ご協力いただきますようよろしくお願いいたします。

令和8年度複十字シール ～スポーツと健康～

令和8年度のシールはイラストレーターのあさいとおる氏によるデザインで、「スポーツと健康」をテーマに描いていただきました。日本のスポーツは歴史や文化と関係しています。子供の頃は、遊びや体育の授業を通して様々なスポーツを経験し、相手を尊重し合うフェアな考えを学びました。世代を超えても、体を動かすことは人々の心の健康と喜びにつながっています。

シールは大型シール（24枚綴り）と小型シール（6枚綴り）があります。複十字シール運動にお役立ていただければ幸いです。



大型シール（24枚綴り）



小型シール（6枚綴り）

シールぼうやと仲間たちの 新しいシールが出来上がりました！

今年はシールぼうやとシールちゃん、シールハイハイにたすけあいインコ、ツペリーナと仲間たちが皆様の健康をサポートする様子をシールにしました。キャラクターシールも是非ご活用いただけますと幸いです。

公益財団法人結核予防会 事業部募金推進課



キャラクターシール